

ホノルルにおける日本人旅館の変遷(一)

飯 田 耕二郎

はじめに

ハワイの日本人の間で、旅館業は最も早くから発達した職業の一つであった。日本からハワイに出稼ぎにやってきた移民たちが移民局での検査をすませてホノルルに上陸し、最初に赴くのは、日本人が経営する宿屋(旅館)であった。その後、「旅館」から「ホテル」と呼ばれるようになり、建物も木造から鉄筋コンクリートへと変貌し、その役割も変化していくが、常にハワイの日本人社会の発展に大きく貢献してきたと考えられる。そこで中心都市ホノルルにおける日本人旅館の草創期から現代に至るまでの変遷を明らかにしておくことは重要であると思われる。本稿ではそのうち一九二〇年頃までの初期の発展の有様やその特色および役割について、当時の資料を引用しながらまとめてみたい。

1. 草創期の旅館と宿屋組合

ハワイにおける日本人旅館は、一八八九年に小島定吉がホノルルのベレタニア街に開業したのが最初といわれている^①。真宗の僧侶でハワイに単身渡航した曜日蒼竜の『布哇紀行』(一八八九年)によれば「明治三二年」三月二日布哇国オアフ島ホノルル府港に着す…府のベレタニヤ街旅亭小島定吉方に至る…十三日より小島の宿を辞し…^②とあり、同書には「小島定吉(山口県人) 村岡勝三郎(全) 島村正造(全) 河村利助(共済会病宿) 鈴木長吉(東京) 中島元次郎(山口県)」と、全部で六名のホノルル日本人旅亭の経営者の名が記されている^③。これらの旅館のうち、小島旅館は小島定吉氏が病弱のために、川崎喜代蔵氏が自分の蓄えと領事館の援助金を足して買い取り川崎屋(旅館)を始めたという^④。その他の旅館はその後どうなったかは明らか

かでない。

当時のハワイの住所録を調べると、一八九〇年に Kishimoto T (岸本敏祐) がヌアヌ街で lodging house を、Kojima S (小島定吉) がベレタニア街で boarding house を営んでいた。一八九二―九三年には、Kishimoto T は boarding house、Kojima S は general merchandise (雑貨店) となり、代わって Kawasaki K (川崎喜代蔵) がベレタニア街で lodgings を営み、Kobayashi U (小林卯之助) から数人も boarding あるいは lodging house を経営していたことがわかる。⁵⁾

一八九三年頃に、日本人商業団体として最初に宿屋組合が組織されるが、その頃についてさまざまな記述がみられる。その中で『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』(一九三五年)に掲載された山城松太郎氏(山城旅館主)の回想録が詳しいので、以下に紹介する。

宿屋組合創立は記録紛失して不明であるが、確か明治二十六年頃と思ふ、当時ホノルルに於ける日本人宿屋は岸本敏祐氏の岸本旅館、吉野屋(山城旅館前身)、水羽源三郎氏の水羽屋、小林卯之助氏の布哇屋、佐藤好助氏の宿屋、川崎喜代蔵氏の川崎屋、西村周助氏の大島屋、錦田直太郎氏の広島屋、市川熊太郎氏の福岡屋、木村彌三郎氏の肥後屋、渡邊宗吾郎氏の熊本屋、伊豆野甚太郎氏の九州屋、藤本七蔵氏の中国屋(米屋旅館前身)、岩本長四郎氏の菊屋、太田米蔵氏の太田屋、長谷助三氏の旅屋等で場所はヌアヌ、ベレタニア、パウアヒ、マウナケア、ホテル街の方面に

多くあった、初代組合長は長谷氏で二十七年頃に一時ホテル街の和發のあたりに合併宿屋を営んだが直ぐ解散して元通りに分かれて営業した、私は二十九年に組合会員になったが明治四十一年迄一期間を除いて小林卯之助氏がスット組合長であった云々⁶⁾

『通商彙纂』第三七号(一八九六年三月)によると当時の日本人旅人宿の数は一五戸とあり、宿屋組合創立当時とそれほど変わっていない。

好調な滑り出しであった日本人旅館であったが、一九〇〇年一月二〇日にチャイナタウンで起こった「ベスト焼き払い大火」で全焼してしまつた旅館が多数あった。その後まもなく発行された『増補改訂新布哇』(一九〇二年)には、宿屋組合事務所のほか、宿屋として川崎旅館(兼商店)、柳井屋、小林旅館(兼商店)、水屋肥後屋(兼料理店)、大島屋、大島屋、角屋九州亭(兼料理店)、岩国屋、福岡屋の九軒が焼失したと記されている。⁷⁾この記録にみられるように、当時の旅館は商店・料理店を兼業とする場合もいくつかみられた。

大火で被害を受けた旅館も、一時他の場所で仮営業した後、もとの場所の近くで営業を再開した旅館が多かつた。

そして、一九〇三年頃、宿屋組合は次のような新聞広告をだしている。⁸⁾

旅館案内

今般在米領ハワイホノルル市日本人宿屋組合は協議の上左の通り連

名を以て広告仕り候也

業務の大略

- 一、各島諸君の御便利を計り宿泊は勿論帝国総領事館其他諸官衙に對する諸願伺届一切の手續き
- 二、各移民会社に於ける積立金取下げの手續き
- 三、帰朝及び渡米乗船切符総て一切の手續き
- 四、妻子呼寄せ上陸の際税関其他一切の手續き

其他労働者に関する労働口等凡て丁寧懇切に御取扱い申すべく候
問倍旧御愛顧陸続後投宿の程偏へに奉願上候也

福岡屋	市川熊太郎	ホノルル、リリハ町
水羽屋	原本他市	同 マヌケア町ベレタニア町
新潟屋	西村周助	同 ケカウリケ町
川崎屋	川崎喜代蔵	同 リヴァー町
熊本屋	有働美則	同 オアフ鉄道停車場前
山城屋	山城松太郎	同 ベレタニア橋詰
九州屋	福島初太郎	同 北キング町
泉屋	小林卯之助	同 パラマ元英国領事館前
中国屋	米屋三代槌	同 リバー町パウアヒ町角
肥後屋	高木源太郎	同 リリハ町
柳井屋	平野竹次郎	同 ベレタニア町橋詰

このように、旅館は宿泊のみでなく、総領事館への届出、移民会社

に関する事務、日本およびアメリカ大陸への乗船・荷物の扱い、家族の呼寄せの手續き、さらに仕事の周旋など多岐にわたり、それらに對する手数料が主な収入であった。「専ら在留民の便宜をも図りつつあるが故に一面代書事務所の感あり。」⁽⁹⁾とも記されている。旅館の数は一軒で、宿屋組合創立当時よりやや減少していることがわかる。
次に、一九〇四年頃の日本人移民の様子を紹介した『最新正確布哇渡航案内』は興味深い。まず、移民の上陸後の模様について次のように記述している。

(ホノル、に上り) いよいよ移民官の検査も済み税関の荷物検査調べも終へた後は、ホノル、に上陸するものは、検査所前に待ち受けたる知人又は宿屋の客引きに誘はれ馬車に乗るもあり徒歩するもあり一旦宿屋に落ち付き茲にて十数日間のくつろぎを慰すのである、棧橋から宿屋迄の馬車賃は一人前二十五仙位なれば不体裁の身なりをして徒歩するより思ひ切つて馬車に乗るがよろしい、荷物は別に荷車にて運搬するが是は凡て宿屋の番頭が世話をして呉れるから之に一任して身体のみ先に行くのだ、此荷物運搬賃は大小によりて差異があるが大抵一個十仙か二十仙位である、此馬車荷物運送賃の如きも凡て横浜の如く宿屋にて周旋して呉れる、其他横浜にて汽船会社に預け置いた見せ金及旅券の受取り並に領事館の登録其他一切宿屋に任するのである(中略)其取扱方から宿料等も同一であるから、何れの宿屋に投宿するも相違はないが、大抵県別により同県人の宿屋に投宿することになつて居

る、左すれば知人の搜索にも便利で言語も同じく事情も通じて万事調査であります¹⁰⁾

次に日本人旅館の有様については、以下のようである。

日本人宿屋 宿屋組合に加盟せる宿屋の数十一軒あり、肥後屋、九州屋、熊本屋（以上熊本県）川崎、米屋、柳井屋（以上山口県）水羽屋「原本」、新潟屋「西村」、山城屋、泉屋「小林」（以上広島県）及び福岡屋（福岡県）是なり、此等の宿屋は組合を作り互に同盟して営業し船切符買入の際汽船会社代理店より手数料を得るの特権あり、此外小松屋、神州屋（共に広島県）あり

日本旅館の殺風景には一驚を喫せざるを得ない一室に這い入るだけ客を詰め込み夜具といったら広い汚れた蚊帳一張に丸太を引切たる枕一箇づつ貸すのみで寝る時は自分の夜具を用ひねばならぬ敷物と云つたら板の間に莫塵一枚張つたきりで火鉢もなければ茶器もなく手を叩いて下女を呼ぶの便もない、飯時とても別に膳を客室に持ち運ぶでなく、下女が案内に来るでもなく賄方が鈴を鳴らして合図をするから之を聞いて食堂に行くべし、飯時でなければ茶が飲みたくとも無いと云ふ有様で日本で云つたら丁度気の利かない木賃宿同様只寝さして食わせるのみ、初めて渡航した人の驚くのは此宿屋である。（。）十数日間海路の難儀を凌いでやつと一安心と思ふ所に右の有様にて誠に不自由極まるが馴れば左までにあらず、凡て西洋では客間と食堂とを区別し食事も時間を定めて時間外には一切飲食をせぬことになって居る、日本人

宿屋も此点は西洋風である、宿料は時々物価の高低によりて増減あるが目下の相場は一食一五仙一日三食で四五仙に泊料五仙として、一日の宿泊料は並等五〇仙である、外に特別と云ふのがあつて食物は並等と同じ様だが寝台夜具も付き又一人一室であるは一日が食料共七五仙です¹¹⁾。

その他、西洋の旅館としてモアナホテル、ハワイアンホテル、ヤングホテルの三軒、また紳士紳商と呼ばれる人は普通の旅館に入らずに海水浴館に投宿し、望月、東洋館、とかしの三軒あることを記している。

ここで、宿屋組合創立当時の旅館の、その後の名称や館主の変更について、知られる限り明らかにし、以下にまとめておく。

「岸本旅館」岸本敏祐

「吉野屋」↓「宇品屋」↓「芸州屋」

↓「山城旅館」山城松太郎（広島県安芸郡仁保島村）

「水羽屋」水羽源三郎↓原本他市（広島県安佐郡三河村）

↓「原本旅館」

「布哇屋・泉旅館」

↓「小林旅館」小林卯之助（広島県佐伯郡地御前村）

「川崎屋」川崎喜代蔵（山口県大島郡久賀村）

「大島屋」↓「西村旅館」

↓「新潟屋」西村周助（山口県大島郡屋代村）

「広島屋」錦田直太郎（広島県安芸郡仁保島村）

「福岡屋」市川熊太郎（福岡県企救郡東郷村）

一時「肥後屋」と合同

「肥後屋」木村彌三郎（熊本県託那船津村）

一時「福岡屋」と合同↓高木源太郎（熊本県菊池郡原水村）

「熊本屋」渡邊宗吾郎（熊本県菊池郡）↓有働美則

「九州屋」伊豆野甚太郎（熊本県上益城郡甲佐村）↓福島初太郎

「中国屋」藤本七蔵

↓「米屋旅館」米屋三代槌（山口県玖珂郡麻里布村）

「菊屋」岩本長四郎↓「中国屋」米屋三代槌・岩本長四郎

「太田屋」太田米蔵（広島県佐伯郡廿日市町）

「小松屋」佐藤好助（山口県大島郡小松町）↓相川茂助↓

「柳井屋」↓「平野旅館」平野竹次郎（山口県玖珂郡柳井町）

注）傍線を施したものは藤井秀五郎『増補改訂新布哇』、文献社、

一九〇二年、六七一〜六七二頁、に掲載された旅店。

（一）内は館主の出身地。

みられるように、旅館名は館主の出身地を冠したものがほとんどであることが分かる。

旅館と出身地との関係については、ジャック・タサカは次のように述べている。

草分け時代のハワイの日本人社会では同郷人意識が非常に強く、同じ県、同じ郡、同じ市町村、はては同じ字（あざ）の人々

が相寄り相助けて事に当たる傾向が強かったので、日本人旅館の顧客たちも経営者と同県・同村の出身者が主体となっていました。

従って広島県出身の人々は広島県人が経営する山城旅館・小林旅館・尾道屋旅館などを多く利用し、山口県出身者は川崎旅館・小松屋旅館・米屋旅館などを利用。

また九州出身の人たちは福岡屋、熊本屋のちの西海屋、東北地方とくに福島県人は東北旅館、沖縄県出身の人たちは九州屋旅館など、主として同県人が経営する旅館を利用していました。

そして、各県からハワイに來航する移民の多少によって、同県人が経営する旅館の数や勢力に違いが生まれました。

面白いのは広島県人の場合です。ハワイに來航した移民の総数では広島県人は終始第一位を占めるほど多数だったので、その利用するホノルルの旅館も、広島市内や安芸郡、とくに仁保村の出身者は山城旅館を利用し、佐伯郡・安佐郡出身の人たちは小林旅館を、尾道・松永・福山など備後出身の人たちは主として尾道屋旅館を利用しました。

また山口県出身者の場合は、移民村として有名な大島郡の人々は川崎旅館や小松屋旅館を、玖珂郡出身の人たちは主として米屋旅館を利用しました。

というのは各旅館では紛失してはいけないと、顧客の旅券・戸籍謄本・出生証明書などの重要書類を預かって頑丈な大きな金庫

に収めて保管するのがシキタリとなっていたので、もし日本に帰国したり再渡航したり、日本に残した妻子を呼び寄せたりする際には、馴染みの旅館に頼めば一切の必要書類が揃っているので便利ですし、また日本の村役場に届け出る結婚・出生・死亡・徴兵猶予など一切の手続きは旅館の方で取りしきってくれました。

ホノルルの日本人旅館にとって最上の顧客は島地に在住する人たちで、特に日本に往復する場合には日本行き便船や各島間の島通いの船便を待つ間、一週間も二週間もホノルルの旅館に逗留しなければならぬので、宿屋にとっては最良のお客でした。¹²⁾

(内容一部省略)

本章の最後に、宿屋組合創立当初から永年にわたって営業を続けた、最大手の四つの旅館について、創業者を中心としてまとめておく。¹³⁾

川崎旅館

一八八五年二月に第一回官約移民としてハワイに来航した山口県大島郡久賀村出身の川崎喜代蔵はカウアイ島カバアで三年間就労し、一八八八年にホノルルに出て、領事館でしばらく働いた後、一八九一年マウナケア街ベレタニア街角の通称カナカ教会の近くに旅館を開業した。

一九〇〇年一月のペスト焼き払い大火で類焼したため、北クワイ街に移って営業を再開したが、ホノルル港の棧橋から遠いので、一九〇二年にリバー街でベレタニア街より山手二軒目に移転して一八年間営

業し、家督を長男の川崎正一に譲って引退した。

小林旅館

小林旅館は、広島県佐伯郡地御前村出身の小林卯之助が一九二(明治二五)年に創業した。彼は村役場の助役であったが、一八九〇年に渡米して、サンフランシスコ郊外のぶどう園に就労中、叔父の小林千古画伯からハワイが将来有望なことを教えられ、同年八月にハワイに来航、同郷人に勧められ一八九二年一月スミス街に旅館「泉屋」を創業した。一八九三年には「ホノルル旅館組合」を組織して、長年にわたり会長を勤めて発展に寄与した。一九〇〇年一月にはペスト焼き払いの大火で旅館が焼失したが、翌一九〇一年にはパラマに家屋三棟を新築して旅館業を再開した。その後、事業の発展に伴い、建物が手狭になったので、一九〇三年二月に北ベレタニア街アラ公園前に移転して、ますます繁盛した。しかし彼は弟の金次郎に後を任せて錦糸帰郷した。金次郎は一六年間小林旅館を経営し、一九二四年一月に五二歳で病没した。

米屋旅館

山口県玖珂郡麻里布村出身の米屋三代植は一八八八年六月に官約移民第五回船でハワイに来航し、マウイ島パイア耕地で三年の契約労働を終えた後、ホノルルに出て一八九三年にソバ屋を開業。一八九七年に「中国屋旅館」を譲り受けて、米屋旅館を創業した。一九〇〇年一月のペスト焼き払い大火に遭ったため、一時イビレー街に移り、仮営業していたが、一九〇二年にリバー街に戻った。

山城旅館

山城旅館の創業者、山城松太郎は広島県安芸郡仁保村の出身で、一八九〇年に官約移民代一四回船で来布した。マウイ島ハイク耕地とブウネ耕地で就労した後、ホノルルに出てヌアヌ街にあった宿屋「吉野屋」を譲り受けて、一八九七年「宇品屋」という名で旅館業を始め、まもなく「藝州屋」と改名したが、ペスト焼き払い大火に遭い、一時クイーン街で仮営業し、一九〇〇年一月に北ベレタニア街カレッジウオーク角に移って山城旅館を新築した。

2. 大陸転航時代と旅館の隆盛

ハワイからアメリカ本土への日本人移民の転航は、すでに官約移民の初期、三年間の耕地労働の契約が満了となった一八八八年頃から始まっていた。しかしその傾向が顕著となったのは、一九〇〇年にハワイがアメリカ合衆国に併合され、従来の契約労働制が廃止され、移民労働者が自由の身になったことで、爆発的にアメリカ本土への転航が盛んになった。これは全くハワイの賃金が、アメリカ西部沿岸地域と格段に差があり、また同地域の人手不足のためであって、アメリカ本土からの斡旋業者に地元ハワイの斡旋業者が加わり、好餌をもって執拗にアメリカ本土への転航を勧誘したからである。さらに日本からも、直接に大陸渡航が困難なため、ハワイを単なる踏み台にして来る者が増え、さらにハワイからの転航が増加したのである。

この大陸転航は、一九〇一年から一九〇六年までが最盛期で、この

間に五万七千人の日本人がハワイからアメリカ大陸に転航したと伝えられている。そのために、ハワイの砂糖耕地や日本人社会は非常な混乱に陥った。転航者の中には、当時盛んであった頼母子講を取った者が後の掛金を踏み倒したり、商店への債務を払わずに大陸へ逃げ去ったものも多く、日本人の事業は一時その安定を失った。

しかしその中であって、ひとり全盛を極めたのが、ホノルルの日本人旅館であった。草創期からの川崎、米屋、小林、山城をはじめとしてその数十軒にもおよび、まさに黄金時代であった。

外務省史料に残る、当時の新聞広告から旅館名・館主(出身地)・場所を挙げてみると、

明治屋旅館 若本由蔵(広島市)・相川寅吉(山口県大島郡)

ベレタニア街橋詰山手三階

③旅館 笹井鹿之助(和歌山県) リヴァー街ベレタニア橋近く

丸一旅館(山口屋事) 星出保治郎(山口県) ベレタニア街

錦屋旅館(開業) 村上末槌・藤井庄太郎

キング街パラマ旧英国領事館跡

肥後屋 高木源太郎 リリハ街

熊本屋 飯川百蔵 アアラレーン

福岡屋 間宮七蔵(福岡県) リリハ街

えびすや旅館(開業) 濱村京一 ベレタニア街スミス街角煉瓦建

神州屋旅館 今中幾太郎(広島県海田市) キング街停車場前

柳井屋旅館

ベレタニア街アラ公園側

山一旅館 布施寅三

ベレタニア街マヌケア街突当り

広島屋旅館 木村與三郎・水田岩吉

ホノルル新魚市場前

越後屋旅館〔不知火館事〕魚住宇太郎（熊本県）・山本政次郎（新

潟県）

キング街パラマ九州屋跡

新潟屋西村旅館

インター棧橋付近

小松屋旅館 佐藤好助

キング街パラマ

井の下旅館 井の下熊太郎

アアラレーン鉄道停車場前

九州屋旅館

筑紫屋

漢城旅館 芳我日下（愛媛県南宇和郡内海村）

スミス街パウアヒ街角

以上の二二の旅館の他にさきの四大旅館も存在したことはいうまでもない。このうち、芳我日下氏の漢城旅館は、ダウンタウンで経営し、転航移民の宿泊と輸送に関わり、シアトルの東洋貿易会社出張員安田治忠と連名の広告を出したり日本に募集人を派遣したりして、大々的に事業を展開して、莫大な利益をあげた。この時期、旅館以外にもアメリカ本土行き乗客の取扱い事務所の広告や、全盛期には、オリンピックア号で乗客五百名扱うという広告もみられる¹⁵。

しかし、一時に多数の日本人が押し寄せたことは、太平洋沿岸各地の労働団体からの非難の的となり、一九〇六年のサンフランシスコの

学童隔離問題に発展し、一九〇八年の日米紳士協約によってアメリカ合衆国への移住が制限されることになる。その結果、宿泊客が減少して廃業に至った旅館も多くみられた。ホノルル帝国総領事報告によると、一九〇八年ではホノルルの日本人旅館の戸数二三であったのが、一九〇九年には一四戸に激減している¹⁶。

ここで一九〇〇年代に開業（または再開業）した旅館のうち、その後長く続いた二つの旅館とその経営者について簡単に紹介しておく¹⁷。

小松屋旅館

一九九六年に官約移民の第三回船で来布した山口県大島郡小松町出身の佐藤好助氏はハワイ島クカイアウ耕地で労働し、三年後ホノルルに出てパラマに小松屋旅館を開業した。しかし一八九六年に帰国、一九〇二年に再渡航して小松屋旅館を経営し、一九一七年より旅館のほかに雑貨食料品店を兼営した。一九二二年に家業を長男の佐藤一郎に譲って帰国した。

尾道屋旅館

広島県御調郡吉和村出身の小出寅吉氏が一九〇五年頃に尾道屋旅館を開業したが、一九一六年に寅吉氏が帰国し、小出祐一氏がその事業を継承し、一九二〇年には設備を外国のホテル形式に改良して、日本人間有数の旅館になった。

3. 一九二〇年頃の旅館

本稿では、村崎並太郎編『最新布哇案内』（布哇案内社、一九二〇

(年)に記載されているホノルルの旅館のリストと場所(後掲地図参照)を示して終わることにしたい。

日本人旅館(①)~⑯の番号と地図中の番号が一致。一部欠)

① 米屋旅館	リバー街	米屋三代樋
② 川崎旅館	リバー街	川崎喜代蔵
③ 山城旅館	ベレタニア街	山城松太郎
④ 尾道屋旅館	ベレタニア街	小出祐一(広島県御調郡吉和村)
⑤ 小林旅館	ベレタニア街	小林金次郎
⑥ 神州屋旅館	ベレタニア街	今中幾太郎
⑦ 東北旅館	ベレタニア街	東海林甚七(福島県伊達郡掛田町)
⑧ 九州屋旅館	アアラ街	永田清(熊本県鹿本郡來民町)
⑨ 肥後屋旅館	アアラ街	高木末熊(熊本県菊池郡原水村)
⑩ 上里旅館	キング街	上里由明(沖縄県)
⑪ 西海屋旅館	キング街パラマ	土山培雄(熊本県)
⑫ 上里別館	ヌアヌ街	上里由明
⑬ 小松屋旅館	キング街パラマ	佐藤好助
⑭ 共楽館	ヌアヌ街	石本庄吉(山口県)
⑮ 西村屋旅館	マウナケア街	
⑯ 望月俱樂部	ワイキキ	望月瀧三郎(東京市麹町区)

宿泊料

大ベッド一泊一人一弗。小ベッド一泊一人七五仙。

マトレス一泊一人四〇仙。食事一食二五仙。

さらに、料理屋も大抵、禁酒実施と共に旅館業を経営している、とある。その一覧表は以下の通り。(A~Nの記号と地図中の記号が一致。一部欠)

A いけす	ワイキキ	B いら船	リリハ
C 常盤園	ヌアヌ	D 大正俱樂部	パラマ
E 洋楽園	クワキニ	F 玉川	ベニヤード
G あづま亭	スクール	H 山水楼	リリハ
I 菊月	ベニヤード	J 三篠楼	ベニヤード
K 新柳亭	ベニヤード	M 松月	ベニヤード
N しほ湯			

望月俱樂部は、ワイキキにあった料亭で海水浴場を設けていた。これについて、一九〇七年当時、日本語の『やまと新聞』の社長であった相賀安太郎は次のように回想している。「その頃はワイキキ海浜の望月が、俱樂部となつて、お歴々以外に若いインテリ階級の遊び場だった。俱樂部とはいふが、実は東京の人望月瀧三郎老人夫妻の事業で、可成り擴々した海浜で、泳ぎも出来る、ボートもある、瀧さんの江戸前の気性と料理と、それに美しい『養女』が三三人いたので、みんなを惹き付け大宴会も出来る。家庭連れでも来るといふ風で、往復の日本人船客も、一寸した人は、皆此所に泊るので、日本にまで望月の名は知られていた¹⁸⁾。このように当時の普通の旅館とは違い、ワイキキのリゾートホテルといったところであろうか。

ホノルルの料理屋は、一八九一年の「壇山亭」が始まりといわれて

いる。一八九六年には日本人料理組合が結成され、ホノルルの料理屋はほとんどが、ダウンタウンに集中していたが、一九〇〇年のペスト焼き払い大火で日本人料理店も九軒が焼失した。この大火が契機となつて、料理屋はパラマヤイビリーの辺りに散在するようになった。とくに名だたる料理屋はベニヤード街とリバー街に集まるようになった。ホノルルの料理店は一九一〇年代が全盛期といわれ、三〇軒近い料理屋があつたが、一九一八年に大統領によってハワイに禁酒令が施行されてから、料理屋は次第にさびれていった。そして料理屋が、旅館業も経営するようになったのである。

分布をみると、普通の旅館はホノルル港とオアフ鉄道停車場に近いアラ公園周辺に集中しているのに対し、料理屋兼旅館業は、その緑辺のヴェニヤード街やスクール街およびワイキキに広がっているのがわかる。

注

- (1) 鷺津尺魔『在米日本人史観』、羅府新報社、一九三〇年、「在米在布日本人歴史の源」六九頁。
- (2) 曜日蒼竜『布哇紀行』、一八八九年、三頁および六頁。
- (3) 同書、四五頁。
- (4) 注(1)および「The Hawaii Hochi」(一九八五年七月一八日)などによると、小島は東京出身で一八八五年に渡布、病弱で労働に堪えずホノルル市に出て旅館業を始めたが、これを川崎喜代蔵に譲り、雑貨・食料品を販売した、とある。しかし、『通商彙纂』第二号(一八九四年二月)によると、「在布哇国日本商人名表」のなかで、小島定吉は

神奈川県出身で食料品及雜貨商としてその名がみえる。また、布哇日々新聞社編『布哇成功者實傳』、一九〇八年、一〇六頁にも、神奈川県愛甲郡小鮎村の出身で、明治一九年布哇に渡来、同二六年よりホノルルにおいて食料雜貨店を開き、とある。

- (5) 『Directory and Handbook of the Hawaiian Kingdom』
- (6) 『官約日本移民布哇渡航五十年記念誌』、日布時事社、一九三五年、一一六頁。
- (7) 藤井秀五郎『増補改訂新布哇』、文献社、一九〇二年、六八二頁。
- (8) 外務省外交史料館史料(382168)「布哇移民米回国航禁禁止一件」明治三六年二月二日 総領事齊藤幹「布哇在住本邦労働者ヲ米国ニ誘出スル者増加ノ件、及び之ニ対シ領事館並ニ我が移民会社ガ其制止策ヲ施シタルノ件」
- (9) 森田榮『布哇日本人發展史』、真榮館、一九一五年、五〇五頁。
- (10) 木村芳五郎・井上胤文『最新正確布哇渡航案内』、博文館、一九〇四年、三七〜三八頁。
- (11) 同書、五四〜五五頁。なお、宿泊料に関して、前掲『増補改訂新布哇』、六七二頁には、宿料米貨四〇仙。飯料米貨一五仙、一ヶ月宿料米貨一〇弗乃至一二弗、とある。また齊藤刀水『ハワイ移民史』一九〇三年、一三三頁にも、宿泊料は一名につき一日米貨五拾仙とす、とある。
- (12) ジャック・Y・タサカ「戦前に隆盛を極めたホノルルの日本人旅館」(EAST - WEST JOURNAL 二〇〇二年八月一五日)。
- (13) 前掲『増補改訂新布哇』、付録在布哇日本人出身録・各業列家九〜一頁および六四頁。前掲『布哇成功者實傳』、一五〜一七頁、三〇〜三二頁、四七〜五二頁。『布哇タイムス創刊六十周年記念号』一八九五〜一九五五『四』などによる。
- (14) 外務省外交史料館史料(382198)「布哇在留本邦出稼人取締ノ為中央日本人会設立一件」明治三八年三月三日 ホノルル総領事齊藤幹「在布哇本邦労働者米国航航最近事情」

- (15) 同前。
- (16) 『通商彙纂』第二九号(一九〇八年五月) および『通商彙纂』第五五号(一九〇九年一〇月)。
- (17) 曾川政男『布哇日本人銘鑑』、同刊行会、一九二七年。および前掲「戦前に隆盛を極めたホノルルの日本人旅館」。
- (18) 相賀溪芳『五十年のハワイ回顧』、同刊行会、一九五三年、一七七頁。

大陸行乗客募集広告

●臨時直航汽船
米國シヤトル行
瀛船オリンピア號
金貳拾八弗（船費及周航料
共悉當濟み）
乗客五百名
出帆期日 四月十八日ホノルル、發
申込期限 四月十日限
右募集致候間アメリ
カ行希望の御方は左記
の各旅館及事務所へ御
申込相成度候

ホノルル、府アミヌシ、バウアヒ街角
漢城旅館内

シヤトル 東洋會社出張所
郵局九五〇 電話白三二六一
向は金額の取引に對しては左記の旅館及事
務所の預收證に非らざるものは無効です

郵六八五 松田事務所
全六九一 佐加事務所
全九二八

全八八九	中山事務所
全八三四	丸一旅館
全七八七	廣嶋屋旅館
全七六三	越後屋旅館
全六九三	九州屋旅館
全八二三	錦屋旅館
全八二一	遠山事務所
全八二三	郷山事務所
全七九三	内外便益商社
全七五八	筑紫屋
全九五〇	漢城旅館

(順序不同)

出所：外務省外交史料館史料 (3.8.2.198)

「布哇在留本邦出稼人取締ノ為中央日本人会設立一件」

大陸航航時代(1906年)の旅館の引札(表)

KOMATSUYA HOTEL

Y. SATTO PROP.
KING STREET, HONOLULU, T. H.
P. O. Box 942 PHOENIX Blue 1311

日本米海船旅客に貨物即取扱所 小松屋旅館



布哇ホノル、海キング街バツ
郵九四二電番三三二

米九十九三船明	
ワラビ	五月九日
ワラビ	五月十五日
ワラビ	五月廿一日
ワラビ	五月廿七日
ワラビ	六月三日
ワラビ	六月九日
ワラビ	六月十五日
ワラビ	六月廿一日
ワラビ	六月廿七日
ワラビ	七月三日
ワラビ	七月九日
ワラビ	七月十五日
ワラビ	七月廿一日
ワラビ	七月廿七日
ワラビ	八月三日
ワラビ	八月九日
ワラビ	八月十五日
ワラビ	八月廿一日
ワラビ	八月廿七日
ワラビ	九月三日
ワラビ	九月九日
ワラビ	九月十五日
ワラビ	九月廿一日
ワラビ	九月廿七日
ワラビ	十月三日
ワラビ	十月九日
ワラビ	十月十五日
ワラビ	十月廿一日
ワラビ	十月廿七日
ワラビ	十一月三日
ワラビ	十一月九日
ワラビ	十一月十五日
ワラビ	十一月廿一日
ワラビ	十一月廿七日
ワラビ	十二月三日
ワラビ	十二月九日
ワラビ	十二月十五日
ワラビ	十二月廿一日
ワラビ	十二月廿七日

米九十九三船明	
ワラビ	五月九日
ワラビ	五月十五日
ワラビ	五月廿一日
ワラビ	五月廿七日
ワラビ	六月三日
ワラビ	六月九日
ワラビ	六月十五日
ワラビ	六月廿一日
ワラビ	六月廿七日
ワラビ	七月三日
ワラビ	七月九日
ワラビ	七月十五日
ワラビ	七月廿一日
ワラビ	七月廿七日
ワラビ	八月三日
ワラビ	八月九日
ワラビ	八月十五日
ワラビ	八月廿一日
ワラビ	八月廿七日
ワラビ	九月三日
ワラビ	九月九日
ワラビ	九月十五日
ワラビ	九月廿一日
ワラビ	九月廿七日
ワラビ	十月三日
ワラビ	十月九日
ワラビ	十月十五日
ワラビ	十月廿一日
ワラビ	十月廿七日
ワラビ	十一月三日
ワラビ	十一月九日
ワラビ	十一月十五日
ワラビ	十一月廿一日
ワラビ	十一月廿七日
ワラビ	十二月三日
ワラビ	十二月九日
ワラビ	十二月十五日
ワラビ	十二月廿一日
ワラビ	十二月廿七日

米九十九三船明	
ワラビ	五月九日
ワラビ	五月十五日
ワラビ	五月廿一日
ワラビ	五月廿七日
ワラビ	六月三日
ワラビ	六月九日
ワラビ	六月十五日
ワラビ	六月廿一日
ワラビ	六月廿七日
ワラビ	七月三日
ワラビ	七月九日
ワラビ	七月十五日
ワラビ	七月廿一日
ワラビ	七月廿七日
ワラビ	八月三日
ワラビ	八月九日
ワラビ	八月十五日
ワラビ	八月廿一日
ワラビ	八月廿七日
ワラビ	九月三日
ワラビ	九月九日
ワラビ	九月十五日
ワラビ	九月廿一日
ワラビ	九月廿七日
ワラビ	十月三日
ワラビ	十月九日
ワラビ	十月十五日
ワラビ	十月廿一日
ワラビ	十月廿七日
ワラビ	十一月三日
ワラビ	十一月九日
ワラビ	十一月十五日
ワラビ	十一月廿一日
ワラビ	十一月廿七日
ワラビ	十二月三日
ワラビ	十二月九日
ワラビ	十二月十五日
ワラビ	十二月廿一日
ワラビ	十二月廿七日

小松屋旅館 敬白

○旅館業務案内
各海船旅客取扱、各埠船賃航務物口周旋、市内労働奉公口周旋、領事館諸願届一切
○三大要章
一船場は最も近く、乗船の便利なるはホノル、日本人旅館中常旅館の右に出づる者なし
一旅館は新築にして諸事新調なり
一旅館が業務取扱の親切にして迅速なるは天下の人認めて以て第一と云ふ所なり

旅館・料理屋の広告

呼寄、歸國、上陸、渡米、渡米延期其の他諸事、移民局、銀行、
 郵局、商社等に付する諸般手續も迅速に取扱い申付御用命有之候様
 保護及民部事務との交渉を御切に取扱可申候に付御用命有之候様

電話三〇八八
 郵箱八五五
 布哇ホテル、山ノ内、レタヘア街、ア、ラ街角

日本雜貨部
 青物卸部
神州屋旅館
 今中商店
 布加物産商會

今中、大塚、大塚、大塚

りあ評定に既に用箱の箱當
 結手ので徳て心安
 いさ下せ任御を

旅館事務と
 郵便事務

布哇ホテル、市
米屋旅館

館内には米國政府指定の郵便支局
 の設けありて、内外送金替爲其他
 一切の郵便事務を取扱ふ

館主 米屋三代 國
 電話三二二二 郵箱八八一

KOBAYASHI HOTEL
 Opp. Aala Park
 Beretania Street, Honolulu, T. H.

△弊館は閑靜にして見晴しよく客室の清潔なる事諸
 設備の完備せること本府に於
 ける唯一の理想的ホテルなり

小林ホテル

△弊館は毎船日本より名士
 寄港の際は常に御定宿の光榮を賜る



館主 上里由明

UESATO HOTEL
 電話三〇八八
 郵箱八五五
 P. O. Box 1505

本館 キングダ街リバー街近く
 電話五四五三 郵箱一五〇五

別館 ヌアヌ街
 電話二五一五

館主 上里由明



會席御料理
 高等御料理
新柳亭

ホテル、山ノ内、レタヘア街角
 電話三二二二



船客様唯一の御休憩所

及御料理持主 小田 助 敬白

KAWASAKI HOTEL

室内整備
 呼寄せ、再渡航
 歸國、渡米、乗船手續
 徴兵徴集延期願、戸籍諸手續
 其他町町迅速に御取扱申上候

川崎旅館

館主 永田 吉
 電話三三九二

館内設備完備
 呼寄せ、再渡航、歸國、渡米
 其他諸手續迅速に取扱申候

九州屋旅館

館主 永田 吉
 電話三五四一



即席會席
 御料理

山水樓

電話八三〇二

原心地よき御膳なら！
 新鮮な御料理なら！
 お風呂も車馬に湧いて居ます

御料理
 御旅館

玉川

福本 寅助
 電話三三三五



高麗な日本座敷、清々しい清潔
 新鮮な御料理、必ず御氣に召し弁

御旅館 菊月

館主 齋藤 義一
 電話二二八八




會席御料理
 高等御旅館

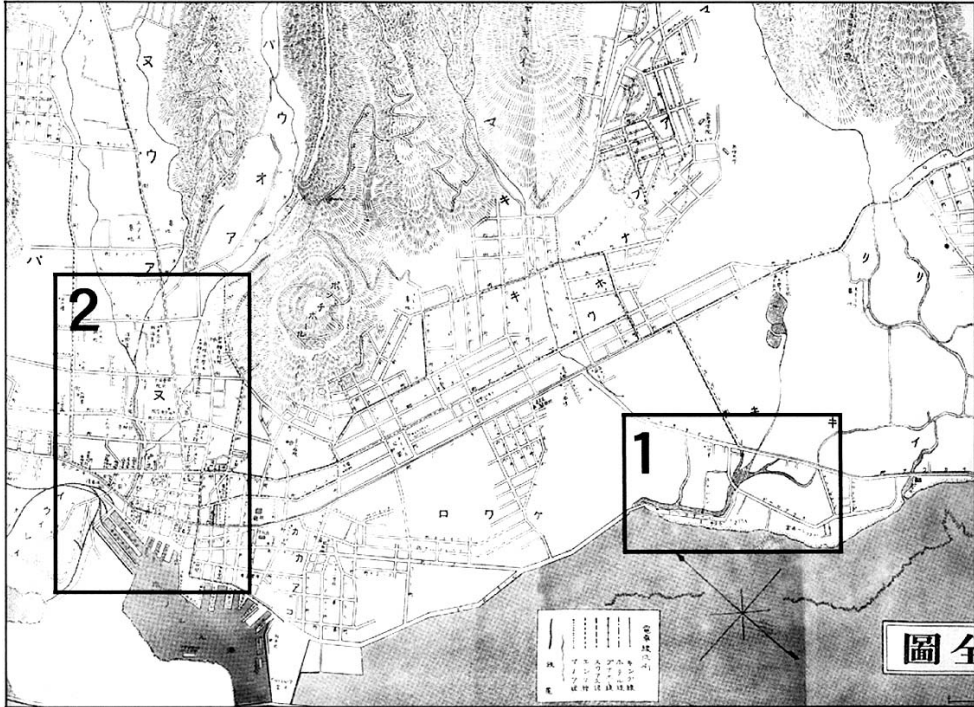
いり船

電話三三三五

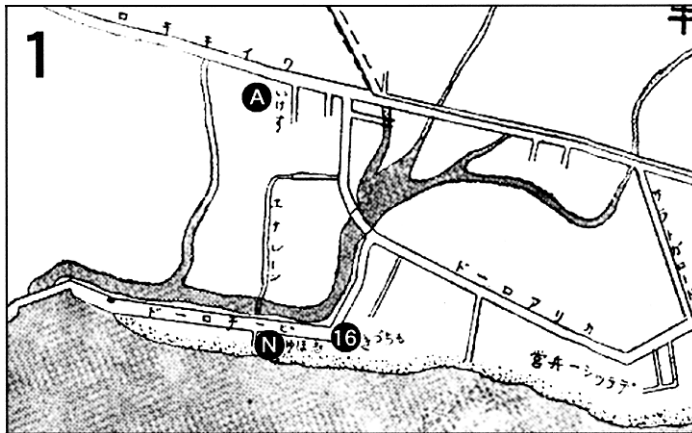
出所：『最新布哇案内』（1920年）

旅館・料理屋の所在地

ホノルル地図



ワイキキ拡大地図



注) 地図中の記号は本文中の記号と一致。
 出所: 『最新布哇案内』 (1920年)

ダウンタウン拡大地図

